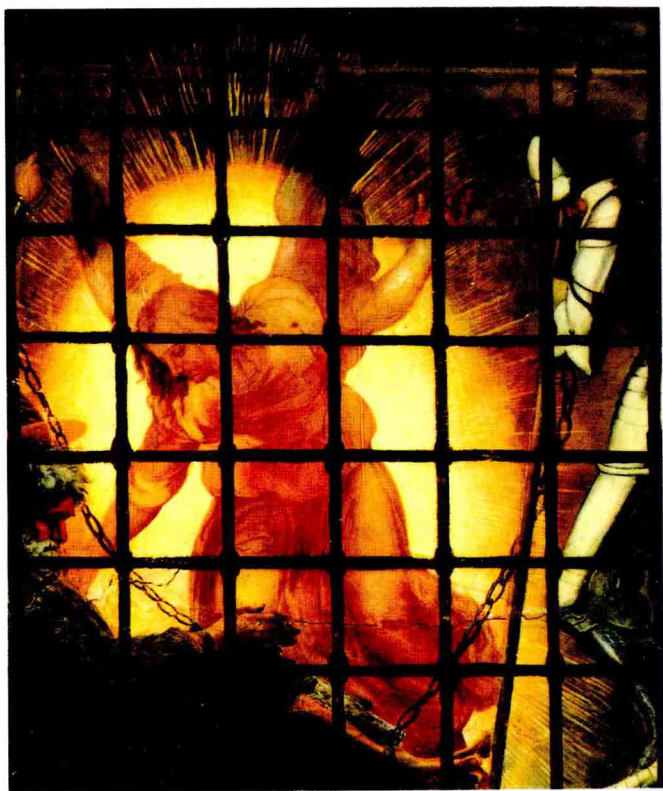


シドニィ・シェルダン作
天使の自立

(下)



天使の自立 (下)

作・シドニイ・シエルダン
超訳・天馬龍行

RAGE OF ANGELS

Copyright © 1988 by the Sheldon Literary Trust

Published 1994 in Japan

by Academy Shuppan Co.

All rights reserved including the rights

of reproduction in whole or in part in any form.

天使の自立 (下)

一九九四年十月十日
一九九四年十月二十日

第一刷発行
第二刷発行

著者 シドニイ・シェルドン

訳者 天馬龍行

発行者 益子邦夫

発行所 榊アカデミー出版

東京都渋谷区鉢山町15-5

郵便番号 一五〇

電話 〇三(三四六四)一〇一〇

FAX 〇三(三四七六)一〇四四

〇三(三七八〇)六三八五

印刷所 中央精版印刷株式会社

©1994 Academy Shuppan Inc.

ISBN4-900430-27-7

アカデミー出版社から
すでに刊行されている
シドニィ・シェルダン氏の作品

「私は別人」

「明け方の夢」

(真夜中は別の顔・続編)

「血 族」

「真夜中は別の顔」

「時間の砂」

「明日があるなら」

「ゲームの達人」

**SIDNEY
SHELDON**

**RAGE OF
ANGELS**

「天使の自立」に賛辞の嵐

“悪魔的面白さ……話題騒然”

————— デンバー・ポスト

“シェルダンは小説の達人。読者を呪縛する言葉の魔術師”

————— フォートワース・テレグラム

“心に残る作品……胸打つロマンスに満ち、息詰まるサスペンスと哀愁と……”

————— コランバス・ディスパッチ

“とびきりの作品……シェルダンはまたまた価値あるベストセラーを放った”

————— サクラメント・ユニオン

“人気があるのも当然である。優れた作品であるばかりでなく、とても面白いのだ”

————— チャタヌガ・タイムス

“シェルダンはまたまたやり遂げた。『天使の自立』は絶対「買い」だ”

————— シアトル・ポスト・インテリジェンサー

“アクションこそシェルダンの本領……達人小説家の秘技でもある。作者が本書で証明したのは、クモの巣のように精巧で脱出不可能な罠を編み上げ、読者をハエのように捕まえて放さないことだ……一度ページをめくったら、何時間も本から離れられないだろう”

————— ウォークガン・ニュースサン

第三十六章

「ごめんよ、姉ちゃん。ここはトニーズプレイスってところで、マイケル・モレッティなんて名聞いたことねえな」

「待って！」

ジェニファーは電話口に向かって叫んだ。

「切らないで！」

今度は努めて声を和らげた。

「急な用件なんです。わたしはマイクの友達で、ジェニファー・パーカーという者ですけど、大急ぎで彼に話したいことがあるんです」

「あなの、姉ちゃん、さっきも言っただろ——」

「それじゃあ、マイクにわたしの名前と、これから言う電話番号を覚えておいて下さい。お願いします！ 必ずですよ」

ジェニファーは相手に自分の電話番号を教えたところで、激しくどもり出した。

「あ、あ、あ。う。か、か、彼に——」

「ガチャン」

耳元で電話が切れた。

ジェニファーは受話器を置きながらボートとなっていた。しかし事態は緊迫している。いつ時たりと無駄にできない。最初に迷った二つの選択肢の一つが頭に戻ってきた。いや、二つ同時だったかもしれない。

デシルバ検事長にしろ、FBIにしろ、彼女の窮状に手を貸さないとはいえない。それは分かっているのだが、ジェニファーを絶望の淵に追い込んでいるのは、この両者ともおそらくフランク・ジャクソンを見つけられないだろうという現実的な判断だった。悠長な捜査にあてるような時間のゆとりはないのだ。

〈明日の朝刊を読めよ〉

受話器に響いた凄味のある声にジェニファアは確信した——男はもう電話などかけてこないだろうし、犯人にたどり着ける痕跡など残すはずがないと。

しかし手をこまねいている場合ではない。できることがあったら、なんでもしなくては。

まず、デシルバ検事長に当たってみよう。ジェニファアは再び手を伸ばして受話器を取ろうとした。と、そのとき、電話のベルがけたたましく鳴り出して、彼女の心臓の鼓動を一瞬止めた。

「マイケル・モレッティですが」

「マイケル！ ああ、マイケル！ お願ひ、助けて下さい！ わたし——」

話し出すと同時にジェニファアはしゃくり上げ始めた。その拍子に受話器を落としてしまった。受話器を拾い上げたときは泣きじゃくっていた。

これで相手に切られてしまっていないかと恐れるあまり、受話器に向かって思いきり叫んだ。

「マイケル！」

「何ごとですか？」

マイケルの声は平静だった。

「落ち着いて！ どういうことなのか、ゆっくり話さない」

「わたしは——わたしが——」

ジェニファアはあわてて深呼吸を繰り返し、体の震えを止めようとした。

「わたしの息子のジョシユアが——誘拐——誘拐されたんです。殺されるかもしれません」

「誘拐したヤツが誰だか分かってるんですか？」

「は、はい。名、名前は、フ、フランク・ジャクソン」

ジェニファアの心臓はドキンドキンと鳴っている。

「何があつたのか初めから話して下さい」

マイケルの口調はあくまでも落ち着いていた。

「あわてないで正確に話すのよ」

ジェニファアは事のいきさつを思い出しながら、ひと言ひと言ゆっくり話した。

「その男の人相や風体を聞かせてくれませんか？」

ジェニファアは犯人の人相を必死に思い出しながら、それを言葉にしてマイケルに伝えた。

「だいたい分かりました。それで、そいつはこの刑務所にいたんですか？」

「ジョリエット刑務所です。ジョシユアを殺すつて——」

「そいつが働いていたガソリンスタンドはどこでしたっけ？」

ジェニファアはガソリンスタンドの住所を教えた。

「泊まっていたモーテルの名前は？」

「ああ、それは」

度忘れしてモーテルの名前が出てこない。ジェニファアはなんとか思い出そうと額に爪を立てた。やがて爪先から血がにじんできた。

電話の向こうでマイケルが辛抱強く待っていてくれる。

ジェニファアはようやく思い出すことができた。

「名前はトラベル・ウエル・モーターです。十番街にあります。でも、もうそこにはいないと思います」

「とにかくあたってみよう」

「ジョシユアを無事に連れ戻して欲しいんです」

マイケル・モレッティは答えなかった。どうしてなのか、その理由は聞かなくても分かる。答える代わりにモレッティが訊いた。

「ジャクソンのヤツを見つけたらどうして欲しい——？」

ジェニファアは肩で息しながらブルツと震えた。

「殺して！」

「連絡がつくようにいつも電話のそばにいて下さい」

電話は切れた。

受話器を置くときのジェニファアは、冷静さを取り戻していた。何かをやり遂げたあのような不思議な気分だった。マイケル・モレッティに頼んだからといって、安心する理由はないはずだ。常識からすれば、なんということをしたんだと言われるかもしれない。しかし、常識なんてもう通用しない。息子が殺されようとしているのだ。毒をもって毒を……殺人者を捕まえる役は殺し屋がよく似合う。でも、この選択がもし間違いだったら……強姦された上になぶり物にされた少女の遺体が、ジェニファアの脳裏をよぎった。

マッケイ夫人の面倒をみなくてはいけない。ジェニファアは彼女のところへ行つて、傷口の手当てをしてから、ベッドの上に休ませた。精神安定剤を用意してやったが、マッケイ夫人はそれを押し返した。

「わたしは眠らなくていいんです」

家政婦は泣き声で言った。

「ああ奥さま、あの男はジョシユアちゃんに睡眠薬を飲ませたんです」

ジェニファアは驚愕して家政婦を見つめた。

急きよ呼び集められた七人の男たちが、マイケル・モレッティの机の前に並んだ。七人のうち最初の三人にはすでに細々と指示が与えられていた。

モレッティは顧問弁護士の一トマス・コーファックスに顔を向けた。

「トム、あんたのコンタクトも使いたいんだ。ナトラス署長のところへ行つて、フランク・ジャクソンに関する調査ファイルを引き出してきて欲しい。どんな細かいことでもいいから持ってきてくれ」

「とつておきのコネだから、滅多なことには使いたくないな、マイク。それにちよつと無理が

「議論してる場合じゃないんだ！ 言われた通りやれ！」

コーファックスが声をこわ張らせて答えた。

「了解」

モレッティは直々の子分のニック・ビトーに視線を移した。

「ジャクソンのヤローが働いていたガソリンスタンドをあらえ。近所のバーに出入りしていたかどうか調べるんだ。飲み友達がいたら、なんでもいいから聞き出せ！」

それから彼は腹心のサルバトーレ・フィオーレとジョセフ・コレラの二人にアゴを向けた。

「モータールへ行ってみる。もうずらかっているだろうが、何か知ってる人間がいるかもしれない」

モレッティは腕を上げて時計を見た。

「いいか、今ちょうど夜中の十二時だ。八時間やるから、それまでにジャクソンのヤローを必ず見つけて来い！」

男たちはいっせいにドアに向かった。その背に向かってモレッティの大声が飛んだ。

「子供に何かねえように気をつけろ。おれはずっとここにいるから、連絡は欠かすな！」

一同が出て行くのを確認してから、モレッティは受話器を取り上げ、ダイヤルを回し始めた。

午前一時。

モーターの部屋は、広くはなかったが、きちんと書いて清潔だった。

フランク・ジャクソンは整頓されたものが好きだ。これは、育ちの良い人間共通の趣味だし、清潔なものに囲まれていると、自分もその一人だと確認できていい。誰も部屋が覗けないように日よけがきちつと下ろされ、ドアは施錠されたうえにチェーンが掛けられている。さらに、不意の侵入者を防ぐために重石代わりの椅子が積まれている。

フランク・ジャクソンはベッドのところに行つて、横たわる子供を見下ろした。睡眠薬を三錠も口に放り込んだから、子供は死んだように眠っている。しかし念には念を入れるのがおれの流儀だ。子供の手足は、あそこの家で老夫人を縛つたのと同じ針金で、がっしり縛つてある。自分の運命も知らずに眠っている子供を見つめっていると、薄情けが頭をもたげて、感傷的になるのを禁じ得ない。

へ神さま、なぜ世間の人間どもはわたしに悪事を強いるのですか？ 本当は心優しく、平和を愛する人間なのに、みんなが冷たくあたるから、こうして自分を守るしかないのです。世間の人間の過ちは、わたしを過小評価するところです。やられたと気がついてからではもう遅いということが分からないのです。

警察がやって来るのをジャクソンは三十分前に察知していた。客のカマロにガソリンを入れていたあのとき、電話が鳴つて、店長が事務所に入つて行くのを見逃さなかった。店長の話は聞こ